

# 台湾 BOOKS



- 大丈夫か、日台関係  
「台湾大使」の本音録
- 内田勝久
- 産経新聞出版
- 1,890 円 (税込)

著者は2002年より3年間、交流協会台北事務所長、いわゆる「台湾大使」として活躍した。大使という職務上、必ずしも自身の思う通りの発言や行動ができたわけではないだろう。しかし、本書に「『正義(道理)か『国益]かの問題に直面するたびに、各国の『国益]の主張に対し、台湾の『正義]が踏みにじられるのを目の当たりにした」との言葉がある。台湾の「正義」を国際社会の中で深く感じていた氏であるが故に、在任中、天皇誕生日レセプションや叙勲を再開した事実や、外務省台湾課の設置提案に際し大きな重みを感じる。 [松下]



- 存亡の危機に瀕した台湾  
中国は台湾を併合すれば  
日本を属国にする
- 宗像隆幸
- 自由社
- 1,470 円 (税込)

日本人として台湾独立運動に挺身してきた著者が、李登輝前総統の最後の任期および2003年以降に発表した最新テキストを収録。今年2月の李前総統へのインタビューをオリジナルで掲載している。激烈な政治闘争、静かな革命の舞台裏は後進へのアドバイスである。安全保障についての対談は脅威の実像を浮き彫りにし、相手を知り自助努力を重視する李前総統の姿勢が窺える。論文は台湾独立の真の意味と課題を解説。日米がこの問題を直視し、誤った圧力をかけないように訴える。台湾独立運動とこれをめぐる国際関係を考えるのに最適の書。 [多田]



- 米中が激突する日
- 黄文雄
- PHP研究所
- 1,000 円 (税込)

本書を読めば、中国の無制限な帝国主義拡大の野望に対し、日本政府とマスコミがいかに無防備であるか、そして、台湾という小国がアジアの平和と安全のための防波堤としていかに重要であるかがよくわかる。中国は台湾や日本を呑み込み、大中華中心の世界制覇を目論む一方で、太平洋の向こうには自由と民主主義を理念とする米国が対峙している。今や米中両国を頂点とした新たな冷戦が始まっており、いつ熱戦となってもおかしくない。近い将来、米中に挟まれた日本は共産党独裁か、自由民主主義を支持するかを選択を迫られるであろう。 [宮本]



- 裏切られた台湾
- ジョージ・H・カー
- 翻訳/蕭成美
- 監修/川平朝清
- 同時代社
- 4,200 円 (税込)

本書は两岸関係、省籍問題、台湾の法的地位など台湾問題の原点を、2・28事件の日撃情報などを織り込みながら、米国副領事が生々しくも明快に解き明かす「怒りの告発書」。筆者は戦前に台北一中や台北高校などの英語教師を勤め、大東亜戦争前に帰米するも、戦後は海軍情報士官として台北に現れ、台北駐在駐米国副領事を勤める中、国民党の台湾人抑圧や2・28事件、蒋介石政権の腐敗ぶりをつぶさに目撃し、1965年に英文版を出版した。本書は40年の時を超え、著者の教え子によって初めて邦訳されたが、その価値は変わらない。 [富田]